

娘

と

私

生

獅

子

文

六

娘と私

上

獅子文六

新潮社版

娘 と 私 (上巻)

昭和三十二年四月二十五日 發行
昭和三十二年五月十八日 二刷

定價 貳百五十拾円

地方
売価 貳百六十拾円

著 者 獅 子 文 六

發行者 佐 藤 亮 一
東京都新宿区矢来町七一

印刷者 塚 田 重
東京都千代田区神田神保町三ノ二三

發行所 株式會社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一

電話東京三四局代表七一(九)
振替 東京 八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷 塚田印刷株式會社 製本 神田加藤製本所
Printed in Japan

娘

と

私

(上)

亡き静子にささぐ

ま え が き

娘が生れたことから、話さねばならない。

彼女は、パリで妊^{くも}られ、日本で生れた。母親は、私の最初の妻である。妊娠八カ月ぐらいで、日本に着いたのだが、産月^{うぶづき}が迫っても、普通の産科医に見せるわけにいかない。彼女は、フランス人で、言葉が通じないからである。尤も、英語は話せるから、外人も診察するという、横浜の産科病院に、入院させることになった。

ところが、その院長の英語というのが、怪しいもので、殆んど、妻と話が通じない。院長も閉口して、私も一緒に、通訳として、入院してくれという。産婦人科病院に、たとえ附添いの名目にしろ、男が寝泊りするのには、規則外れなのだが、院長の方から、それを望んだのである。妻は勿論、その方を喜んだ。

私も、まだ若かったが、産科病院の生活は、生れて最初であり、異様な経験だった。妻はベッドに横わり、私は次室で、日本夜具に包^{くる}まって臥^ねるような生活を、続けた。割りに涼しい夏だったが、女ばかりの世界に、男一人が紛^{まぎ}れ込んだ、窮屈な毎日を送ってるうちに、八日目に、妻が産気づいた。

娘が生れたのは、大正十四年八月二十六日である。朝から、天候が悪かったが、午頃^{ひるごろ}から、烈しい暴風雨に変じた。窓を打つ風と雨の音と、周期的に襲ってくる陣痛の声を聞いていると、私の心は、甚だしく動揺した。外国人の陣痛の叫びは、大きいというが、妻もその例に洩れなかった。殊に、初産^{はつざん}であるから、苦痛と恐怖が、烈しいのであろう。その声を聞いていると、私は、子

供なぞ生れなくてもいいと思ひ、あんな残酷な苦痛が、妻の体から去ってくれることのみを、念じた。

妻は担架で、分娩室へ運ばれたが、この時だけは、私も通訳として、同行を避けた。だが、いつまでも、妻の悲鳴が耳について、離れなかった。實際、こういう場合の良人というものは、だらシなく、何の役にも立たず、ウロウロして、夢中で、煙草ばかりフカす外なかった。

だが、再び、担架で病室へ帰ってきた妻は、ケロリとして、静かな、しかし疲れた微笑を浮べながら、「ボンと出てしまつて、それでお終い！」と、冗談をいった。ナアーンだと、私はパイ食わされたような氣持になったが、続いて、看護婦が抱えてきたモノを見ると、ギョッと、胸が迫った。

「当りましたよ。女のお子さんですわ」

と、看護婦が、白布に包まれたモノを、私の前に差し出した。

私は、出産の前から、初めて持つ自分の子が、どうも、女の子のような氣がしてならなかった。パリにいる時からして、その予感があった。

だが、今は、男女の別なぞ、問題でなく、ただ「初めて子を持った」という意識で、頭も、胸も一杯だった。私は、一心に、「わが子」を覗き込んだ。小さな、小さな存在だった。普通の赤ん坊のように、真ッ赤ではなく、眼が大きく、繊細な手を動かし、口からバラ色の舌を、少し、現わしていた。ジッと見てみると、私の胸の扉が、音立てて開き、私の魂が抜け出して、赤ん坊の中へ入っていくような氣持になった。

感動で、私は、立っても、坐ってもいられなかった。産婦は、疲れて眠り出し、看護婦が、赤ん坊の世話をしていたが、私は病室を飛び出して、世界中の人に、わが子の誕生を告げたい衝動

を、感じた。

実際にも、姉と弟のところに、無事出産の電報を打つ必要があった。私は、それを口実に、外へ飛び出した。出産は、午後五時一分だったそうだが、街路へ出た時は、もう、薄暗く、暴風雨の勢いも、弱まっていた。それでも、私はビショ濡れになり、桜木町駅まで行って、電報を打った。二通の電報では、もの足りず、親戚と知人の全部に知らせたい要求を、やっと抑えた。

私は、そのまま、病院へ帰る気がしないで、野毛町の、小さなシナ料理店へ、飛び込んだ。暴風雨で、戸を閉めてる家が多かったが、その家だけ、営業していたのである。私は、全然、空腹を感じなかったが、ただ、酒が飲みたくて、堪らなかった。

ビールやシナ酒を啐りながら、私は、ニヤニヤ笑ったり、独り言を洩らしたり、狂態を演じたことであろう。『子を持った』という感動で、大波に揺られるようで、自制心を失っていた。そのくせ、私は、子供が欲しいなぞと思っていたことは、一度もなかった。文学の世界へ入っていくのに、子供なんか、邪魔ッ気だと思っていた。その上、私は貧乏で、子供を育てていく自信も、なかった。それなのに、初めて父となった喜び——いや、喜びなぞという、単純な感動ではなかったが——は、そんなに、大きかった。

「名前を、つけなければならぬな」

私は、揺れる心を、強いて落ちつけ、考え方を具体的にしようと思つた。

「やはり、麻理がいいかな」

パリにいる時から、もし、女の子が生れたら、その名はどうかと、考えていたのである。マリ（Marie）という名は、フランスの女性に最も多く、最も平凡な——日本なら、花子に相当する名である。そういう有り触れた名が、あの国人の血を享けたことのシルシになるし、また、そ

んな漢字を当てはめれば、日本の名としても通用すると、思っていたのである。そして、その頃から、「麻理」という名の外は、全然、頭に浮ばず、男の子の名は、いくら考えても、徒勞^{とらう}だった。「よし、それに決めた！」

私は、強烈なシナ酒を、飲み干して、イスを立ち上った。おかしなことに、今度は、一刻も早く、病院へ帰りたくなったのである。そんな名にきめたことを、妻に語りたかった。尤も、Marieを日本名にする試案^{しあん}は、度々、彼女に語り、彼女も賛成していたのである。

外へ出ると、もう、雨が止んでいた。私は、台風の名残りの風の中を、駆けるように、衝き進んだ。

それから、暫くして、私は、今の世田谷区代田橋の近くに、「わが家」を持った。わが家といっても、勿論、貸家であるが、妻と子と共に、家庭を営むということは、私の人生の最初の経験だった。

その家は、安普請^{やすぶしん}だが、モルタル塗りの外壁と、赤瓦の新築で、その頃から流行し始まった「文化住宅」の一軒だった。屋根裏を入れて、四間^よしかない小屋だが、パリで貸間住いをしていた私たちには、広過ぎる気さえた。

私は、そこを根城^{ねじょう}にして、世の中へ出ていく意気込みだった。といって、私には、何一つ、仕事のアテはなく、生活費は、父の遺産の最後であった地所を売り、その金で居食いをしていた。しかし、私は元気で、頼まれもしない翻訳を、日課のように、毎日続け、そのうち道が開けるだろうということを、なんとなく信じていた。

妻も、元気だった。見も知らぬ外国へきて、貧しい生活をするのだから、ずいぶん心細い筈ではあるが、彼女は、そんなことに屈する女ではなかった。反対する両親を、強いて説き伏せて、私と結婚し、日本へきた彼女は、相当、深い覚悟を持っていた。

この辺で、妻について語る必要があるかも知れないが、私は、この物語を、彼女が病死し、私と幼い娘が取り残されたところから、筆を起すつもりであるので、詳しく書く気は持っていない。彼女と私が、どうして結ばれ、パリでどんな生活をしていたかというようなことは、また、別の機会に、語りたいと思っている。

彼女は、エレーヌと呼ばび、中部フランスの小さな町の小学校長の娘だった。女学校を出てから、ロンドンへ英語の勉強に行き、その語学の助けで、パリの米国人商社に勤め、自活してゐるうちに、私と知り合つたのである。その時、彼女は二十六歳、私は三十を迎えていた。翌年の冬に、彼女は麻理を妊娠した。

彼女は意志の強い、理性に富んだ、そして極めてジミな女だった。彼女の情熱は、潜在的で、堅実で、道徳的でもあった。私と結婚前に、社会主義運動なぞに加わつたのは、その一例であつた。体は、骨格型の中肉中背で、容貌も平凡、やや近視である外に、病気を知らず、パリ女の纖弱さと遠い女だった。

貧乏を苦にも、恥にもしない彼女は、貧弱な和洋折衷の生活に、不平なぞコボさなかつた。朝は、パンとコーヒーだが、昼と夜は、殆んど、和食であつても、文句をいうどころか、味噌汁や刺身を、好物と称した。尤も、彼女は読書好きの女の持ち前で、料理が得意でなく、パリでも、安飯屋で外食ばかりしていた。その点、食いしん坊の私と、まるで反対だった。日に二度の和食をするのは、経済上の必要と、台所をする老婢が、それ以外に知らないからだつたが、米の飯に

飢えていた私には、妻が喜んで和食を食べるのを、むしろ、幸いとした。

赤ン坊だけは、安物のベッドに臥かしたが、私たちは、敷物の上に布団を展べ、日本夜具に包まった。臥てる枕許に、テーブルの脚が、迫っているような殺風景さも、若い私たちは、気にしなかった。

貧しい家計を助けるために、彼女は、フランス語の出張教授に出ていった。一回二十円ぐらいの報酬でも、その頃は大金であり、生活費の半分ほどは、彼女が稼いでくれた。尤も、私も、机に向ってばかりもいられず、子供の守りをしたり、風呂水を汲んだり、時には、料理番も勤めた。亭主兼主婦の役廻りは、煩雑だったが、生活にハリがあるので、少しも苦にならなかった。

麻理は、健康に育っていった。顔もクリクリ、眼もクリクリした、血色のいい赤ン坊だった。肌の色がトースト色で、髪も、黒褐色で、瞳も、青さがなく、混血児の特徴に乏しかったばかりでなく、女の子とさえ、見えなかった。動作が元気で、声立てて笑い、泣声も大きかった。

神田のカトリック教会で、彼女は、洗礼を受けた。代母は、私の友人の妻のフランス人だった。私は、妻が麻理に洗礼を受けさせたいといった時に、少し、不審に思った。なぜといって、妻は、社会主義に興味を持つくらいで、まず、私と同様な、無神論者の仲間だった。私たちの結婚も、まったく、教会の世話にはならなかった。それなのに、わが子の洗礼は、何の躊躇もなく、受けさせた。私は、日本の親が、七五三の宮詣りをさせるのと、同じ心理かと考えたが、フランス人の血に潜むカトリックの信仰は、もっと根強いものであることを、後に知る機会があった。

麻理の最初の誕生日を迎える頃には、私の仕事も、やっと、芽を吹いてきた。舞台の研究書や、フランス戯曲の翻訳や、アテもなしに書いて置いたものが、出版される運びになった。そして、世の中が、大正から昭和と変って、円本時代というものが始まり、近代劇全集の翻訳者の一人と

して、私は、どうやら、生活の道が立つようになった。また、ある劇団げきだんの演出者として、その頃の私の本願であった舞台の仕事に、いそしむこともできた。

麻理は、日増しに、可愛い子になった。三つ、四つ、五つ——その頃の彼女の可愛さを、私は、忘れることができない。肉づきのいい、表情のイキイキした、見るから、健康そうな、快活な子供だった。元氣過ぎて、私に跳びついたハズミに、私の前歯の継続歯を折ってしまったこともあった。そして、彼女は、その頃の日本の子供の洋装としては、最も可愛げなものを、着せられていた。

妻は、料理下手ではあったが、裁縫は好きだった。自分のドレスは、パリでつくったものを、いつまでも着ていたが、麻理の服は、一切、わが手で新調した。フランスの婦人雑誌などに出て、子供服の型を、私にも相談して、あれこれと選び、ミシンの音を立てた。白セルのツー・ピースで、襟に細い縁取りのように、あり合せの黒い毛皮を縫い込んだ服なぞは、まず、妻の傑作だったろう。その頃の女や子供の洋装は、非常に幼稚だったから、妻が、その白い服を着た麻理を連れて歩くと、人が眼を敬そはだてた。

麻理は、近所の子供と遊ぶようになり、妻の日本語より、遙かに上手になった。妻も、最初はカタコトの日本語で、わが子と喋しゃべっていたが、麻理が三ツぐらいになると、断然、フランス語の行儀のいい言葉を、教え始めた。

「お母さん、どうぞ……と、いいなさい！」

容赦なく、麻理は、言葉使いを直された。廻らない舌ながら、じきに、彼女は、正しいフランス語を喋るようになった。私は、自分の、フランス語の発音の悪さを知ってるから、彼女に伝染しないためにも、なるべく、日本語で話した。そのために、彼女は、日仏語ともに上達した。

麻理が、言葉の外に、上達したのは、キスであった。『おやすみなさい』をいって、寢床につく時、何か貰って嬉しい時、彼女が両親の頬にキスする習慣は、妻が教えたにちがいないが、口で教えただけでは、軽い、自然な、親子間のキスは、習得されないだろう。結局、母親の血をひいてるからと、解釈する外はないが、彼女のキスは、不思議と上手で、微笑まらずにはいられない軽い音と、感触を、私の頬に与えた。

私たちの家庭は、まず、幸福といえた。無論、夫婦喧嘩がないわけでもなく、その口争いは、いつもフランス語でやるから、語学的に私の敗北に終り、癪癪を起して、物を投げるようなこともあったけれど、動機は、他愛もないことだった。喧嘩の後はずっと仲が直った。

一つには、私の翻訳の仕事の収入が殖え、時には、小旅行をしたり、家具を買入れたりするうちに、家計が順調になったからであろう。妻のフランス語教授の収入も、家計に繰入れず、彼女の小遣錢に廻すことになった。また、妻もフランスの女の友人が殖え、最初ほど、社交の孤独を感じないで済んだ。

しかし、その当時の私が、果して、どれだけ、よい良人で、よい父親であったか、疑問である。私は、あまり、女遊びなどしなかったが、友人と酒を飲んで、晩く帰るようなことは、度々だった。そんなことよりも、妻にとって、最も物足りなかったらうと思うのは、私が、まだ、人の父であり、人の良人であるに相応わしい、人間的成長を、遂げていなかったことだろう。今から考えると、私は、まだ、まったくコドモであった。フランスの同年輩の男と比べたら、考え方でも、態度でも、ひどく、子供臭いにちがいがなかった。私は、自分自身のことを考えるのが、精々の男であり、妻や娘に対する愛情と、自分の仕事の情熱とを、整理したり、按配したりすることも、知らぬ男だった。

私に比べれば、妻は、成熟した一人の女であり、人生も、私より知っていた。年は四つ下でも、彼女は「姉さん女房」であった。その上、外国人であり、私たちの家庭生活は、よほど、世間とちがっていたと思われる。

だが、麻理が、算え年六つの新年を迎えた時に、不測の災いが起った。妻が、発病したのである。

妻は、心臓の持病が昂じ、それに、神経衰弱が加わったといわれ、私には、彼女がムリして、日本生活に融け込もうとした結果とも思われ、友人のフランス婦人が経営するホテルに、暫く、静養させたりしたが、経過は、歩々しくなかつた。

その年の秋に、私は、医師とも相談の結果、彼女を連れて、フランスに行くことにした。彼女の両親が住んでる所は、山間の静かな町であり、療養生活には、好適の場所であった。

しかし、麻理をどうするか。彼女は、長途の旅行に同伴するには、あまりに小さく、且つ、子供の養育は、病人にとって、過重な負担である。といって、私たちの留守の間、幼い者を、安心して預けられる家がある筈もなかつた。

幸い、その話を聞いて、朝鮮にいた姉夫婦が、進んで、麻理を引受けると、いつてくれた。姉夫婦は、子供がなく、東京へ出てくると、麻理を、よく可愛がった。混血児として、親戚間の妙な視線を浴びていた麻理も、姉は、唯一人の姪として、義兄は、外国生活の長い男で、偏見がなく、二人から愛されていた。

私は、麻理の手を曳き、平壤までの長い旅をした時の寂しさを、今もって、忘れることができ

ない。五年間、好調に進んだ私たちの家庭生活が、突然、破壊された悲しみを、その旅に出て、初めて痛感した。そして、子供を置いて帰れば、病妻を連れて、更に長い旅が、私を待ってる。不完全な父親であり、良人であった私は、意気地もなく、この不幸に打ちのめされ、ともすると、感傷的になった。

姉夫婦の愛情は、信用しているが、子供を残してくることに、堪えなかった。明日は出発という日に、私は、なるべく、麻理の側にいない方がいいと思ひ、平壤の郊外を独り歩いたが、晴れ渡った寒い空から、カラカラと、井戸釣瓶つるべの音のような、鶴の啼き声が聞えた。二羽の鶴が、非常に高い空を、円舞していた。その声ほど、悲しい声を、私は生涯のうちで、聞いたことはなかった。

ありがたいことに、麻理は、別れる時にも、快活だった。母と別れる時も、彼女は、不思議といていいほど、無関心だった。それを、私は、どれだけ感謝したか、知れなかった。

*

秋が深くなる頃に、私は、病妻と共に、フランス船ポルトス号に、乗込んだ。マルセーユへ着くと、彼女の父が、埠頭ふかどへ出迎えていた。そして、月の明るい夜更けに、山国の小駅に降り、彼女の生家に入った。

暫く、そこに滞在してから、私は、パリに出た。私は、パリの演劇を観て置かねばならなかったし、妻の実家に長く厄介になることは、避けねばならなかった。

数年振りで、私は、安ホテルの独身生活を味い、時々、田舎いなかの病妻を見舞った。そのうちに、日本から、意外な手紙が届いた。姉の良人が肺結核に罹かかって、当分、別府で静養することになっ